

號二十第卷六十第部樂俱年幼 行發日一月二 昭和二十一年十一月六日（刊發日一回一月毎）可認物便郵種三第百八十二月一十年四十五大

臣道實踐
職域奉公

幼年俱樂部

號月二十

○へうし「げんきにきたる」……多田北鳥（表紙製版加藤仁一郎）

く すみはこび 川上 四郎（一）
うみのあらわし 飯塚 鈴兒（二）
松岡映丘畫「矢表」 松垣 篤雄（四）
げんきな つなひき 白石 隆一（六）
木のはの こうさく 山下 俊三（八）
くすりやさん 小野 忠孝（三）
ふりかへつて 清水かつら（次）
だいこんとり 滑川道夫選（百）

うえうど しんがう
だいこんとり サトウ・ハチロー詩 (13)
こんげつの おやくそく 朝比奈策太郎

じどう えいじわ すゑとら 後藤 楠 根（奎）

長彦と丸彦 豊島與志雄（百）

元ちやんの子もり 澤井一三郎（哭）

ヒノキマル 濱田廣介（哭）

●風のはなし 吉田 弘（合）

どと 木まぶり 宮崎紀雄（多）
うほ おちやがらと こん 水上不二（三）
わん ねばうしたあさ 水島あやめ（五）
赤いセーター 水谷まさる（六）

コグマノコロスケ 芳賀まさを（六）

こんぶのおんじん 椎名 一郎（三）

わすれられない松次號 上澤 謙 二（三）

スンガリーの朝 石森 延男（四）

海軍潜水學校けんがく 乾 信一郎（五）

キリンのともたち 久米元 一（二）

かんがへ太郎 大木雄 二（二）

渡 邊 登 安 藝 三 郎（二）

せんとらけん 堀 七 藏（二）

私たちのけんきう

◎もつたいない 香川 鐵 藏（五）
◎たのしいこうさく 大迫 義 紀（五）
◎私はなんでせう 柚木 卯 馬（二）
◎大 は ら へ 宮村才 一 郎（三）
◇ひまはり はらだ しげひさ（二）
◇わがまますか 林 勝世（二）
◇かみでつばう 筑摩 鐵平（三）
◇新年號のあしらせ 御家庭の皆様へ
◇児童讀物懸賞入選發表 みなさんこたへられますか（六）
◇もくじのふ「に」とり 黒 崎 義 介

【製版】 本誌に掲載せるものは、一切
上製版を依頼し、印刷は、又、
製版行を委託することを要す。



こんぶのおんじん

椎名一郎
布施長春畫

◇たいせつな こんぶ

お正月になると、みなさんは、こんぶでつくった、こぶまきをたべますね。こんぶは、よろこぶといふことばに、にているので、おめでたい時によくつかはれます。

そのほか、みなさんのおうちでも、にものや、おつゆのだしにしたり、きりこぶにしてたべたり、いろいろにつかはれますね。そのこんぶには、私たちのからだをつよくする、たいせつな

はうばうへおくり出します。

むかしは、うみのそこのいはに、ひとりではえてあるこんぶを、そのままとつて來るだけでしたが、いまから七十年あまり前に、こんぶを人のちからではやして、たくさんとれるやうにくふうした人があります。

◇すりばちのかげら

北海道の函館のちかくで、れふしをしてゐる山田文右衛門といふ人がありました。

まい日ふねにのつて、さけやにしんをとつたり、さかなのとれない時には、こんぶをとつて、くらしをたててゐました。

ある日のこと、ふねにのつて、北海道のみなみのうみでれふしをしてゐた文右衛門は、ふとうみのそこに、めうなものを見つけて、お

じやうぶんがあるので、私たち日本人は、むかしからさかんに、こんぶをたべてきました。また、こんぶからは、沃素といふものをとつて、それから、いろいろなくすりができてます。みなさんが、しもやけにかかった時や、けがをした時などにつけるヨードチンキも、やはりこんぶからできます。

◇こんぶのとりかた

このたいせつなこんぶは、きたの方の北海道や、樺太のうみから、たくさんとれます。こんぶは、うみのそこのいはに、はえてゐます。まるで、おびのやうに長くなつて、なみのまにまに、ゆらゆらとゆれてゐます。

これを、ふねの上から長いさををのぼして、からめとり、かいがんのすなの上でほして、

もはずはつとしました。

ふかさ三メートルばかりの うみのそこに、だれがなげすてたのか、すりばちのかけらが おちてゐて、そのかけらから、長いこんぶが 八九ほんもはえて、ゆらゆらとなみにゆら れてゐるのです。

「これはおもしろい。わしはこれまで、こんぶといふものは、うみのそのいはにだけしかはえないものだとおもつてゐたのに、これで見ると、すりばちのかけらからでも、りつばにはえるのだ。さうだ……」

文右衛門は、なにごとかかんがへついたらしく、うれしさうに、その日はかへつていき ました。

◇ 雨の日も風の日も

すりばちのかけらに はえたこんぶを見つ けてから、文右衛門は、まい日うみにふねを うかべて、こんぶのはえてゐるうみのふかさ や、そのばしよの しほのながれなどを、ねつ しんにしらべはじめました。また、

『すりばちのかけらにはえるこんぶなら、石 にもはえるにちがひない。』

どんな石がよいかと、いろいろしらべはじ めました。雨の日も、風の日も、きりの日も、 文右衛門の このしらべはつづきました。

そして、長いあひだかかつて、とうとう文 右衛門は、どんなばしよがよいか、どんな石 がよいかといふことを、すっかりしらべあげ ました。

いよいよあくる年、文右衛門は、五さうの

ふねに、石をたくさんつんで いつて、前にしらべたばしよ へ、どぶんどぶんとなげこみ ました。一つなげこむたびに、 この石にこんぶがはえるぞ、 こんぶがたくさんとれるぞ、 おくのためだ、とおもひな がら、なげこんだ石のかずは、 みんなで二まん七せんもあり ました。

そのつぎの年には、五まん あまりの石をなげこみまし た。ところがその時、きよ年 なげ入れた石は、どうなつた かとおもつて、うみのそこを





のぞいて見ましたが、こんぶどころか、なんにもはえておません。

お手つだひの人たちは、みんなわらつて、『文右衛門さん、いくら石をなげこんだつて、こんぶなどがはえるものですか。むだですからおよしなさい。』

といつて、とめるものさへありました。

『いや、そのうちきつとはえる。』

文右衛門はさういつて、それからまよい年こんきよく、石をなげこんでみました。

◇ うみのそこのはたけ

いつのまにか四年たちました。

文右衛門は、ことしもまた石をなげこまうとおもつて、うみへ出かけていきました。するとどうです。一ばんはじめの年になげこん

ました。

文右衛門は、さつそくそのこんぶをとつて、『これは、うみのはたけでとれたこんぶです。』といつて、兩館のおぶぎやうさまの所へ、もつていきました。おぶぎやうさまも、たいそうめづらしくおもつて、それを江戸（東京）のしやうぐんさまの所へおくりました。

それから、みんなが文右衛門のまねをして、うみのそこへ石をなげこみ、こんぶのはたけをつくるやうになりました。いまでも、北海道や樺太でやつてゐます。そして、ひとりにはえるこんぶとあはせて、日本ちゅうや、支那などへ、どしどしおくり出してゐます。こんぶのおんじん、山田文右衛門の、たふとい くしんのおかげです。（をはり）



だ石から
りつばなこん
ぶが はえて、ちや

うど、川にぬのをさらしたやうに、ゆらゆらとゆれてゐるではありませんか。そのこんぶのあひだを、小さなさかなが、うれしうにおよぎまはつて、まるでりゆうぐうじやうのやうでした。

『やあ、できた、できた。』

文右衛門は、ふなばたをたたいてよろこび